

西谷哲学におけるエックハルト解釈について

On the Interpretation of Meister Eckhart in the Philosophy of Keiji Nishitani

山崎達也 (創価大学)

Tatsuya Yamazaki

神秘的合一 (unio mystica) をいかに解釈するかによって神秘主義解釈の様相は異なってくる。西谷がエックハルト思想を神秘主義としていかに理解し、そして神秘主義の本質をいかに理解したのか、というテーマは西谷哲学の基本構造を明らかにするうえで必須のことのように思われる。というのも、1938 年に発表された「ニイチェのツァラトゥストラとマイスター・エックハルト」を端緒とし、1940 年の「独逸神秘主義」を経て、1948 年に刊行された『神と絶対無』において、西谷は一貫してエックハルト思想の解明に努めているからである。さらには、1961 年に刊行された『宗教とは何か』の第 2 章「宗教における人格性と非人格性」において、西谷は現代における科学と宗教との相克の問題を解決する一端としてエックハルトに言及しているが、本章が「虚無と空」の前に置かれていることに注目し、その後の西谷哲学における空解釈の展開を考えると、エックハルト解釈は西谷のなかで重要な位置を占めていると思われる。

以上の点から西谷におけるエックハルトの神秘主義理解を考察するとき、西谷は神秘主義を「所謂『宗教』をも超えた程に深く宗教的な立場」あるいは「有神論と無神論との彼岸ともいふべきもの」として理解していることが見えてくる。

本報告ではまず、エックハルトにおける神と魂（西谷は霊と語る）との合一思想の中核を能作的合一と理解する西谷の解釈を紹介する。西谷によれば、能作的合一とは主体的合一あるいは主主合一といわれる。ここに西谷におけるエックハルト解釈の特徴がある。さらに西谷は、アリストテレスに由来する神の存在を表示するスコラ的概念すなわち *actus purus* を「純なる能作あるいは純粹現行」と訳し、この概念をより闡明化することによって、中世スコラ学におけるエックハルトの位置と際立ちを提示している。

しかしこの能作的合一は神性を含めて自己自身を魂に与えるという神の働きを前提としている。ここから神と魂との相互突破の思想が導かれるが、西谷はここに魂の神化を認める。ここで注目されるべきはエックハルト思想における「神」と「神性」の差異化である。そこで『神と絶対無』においても引用されているドイツ語説教 109 のテキストに即してエックハルト自身がこの差異化をいかに語っているのかを、ラテン語著作『ヨハネ福音書註解』の関連個所のテキストを提示し、重層的に考察してみたい。

使用言語：日本語